



巻頭言

理事 岸本 浩



「知の愚連隊」 — 自由な発想のために —

19世紀の終わり、科学は（物理学は）もはや終わった科目と見なされていたと言う。あのマックス・プランクもミュンヘン大学に入学の時、物理学の教授から、もうこの分野には新たな発見はない、と言われたというエピソードはしばしば語られるところである。その後一世紀が過ぎ、物理学は驚異的な変革を遂げ、引き続き原子力、計算機、レーザー等々の技術革新が奔流となって我々の身の周りを洗ってきた。革新は必ずしもアカデミズムの殿堂や強力な国家、企業の開発にのみあったわけではない。

大学で卒業研究を始めた時、研究室の壁一つ隔てた隣室は大学の計算機室であった。日本初と称された計算機を始め、今から見ると可愛い計算機が、空調の効いた部屋の中でカタカタと動いていた。何人もの同級生がここで学び産業界に進んでいった。計算機開発への熱い思いを込めたコメントのついた年賀状を毎年もらった。しかしやがてそれは、際限無く広がるIBMとの技術格差への嘆息に変わっていった。日本政府も、新世代計算機開発に乗り出した。丁度そのころ、JT-60の建設に地を這うような日々を送っていた私には、新世代計算機のプロジェクトは実に華麗に見えた。しかし、素人の私にも揺らぐことはないと思えたIBMの牙城は、このような国家プロジェクトでもなくライバル企業の血みどろの挑戦でもなく、1970年代終わりからアメリカの若者達が自宅のガレージで始めたマイコン作りによって根底から揺り動かされ、それは今社会構造の変革にまで及びつつある。

先端基礎研究センターが創られる1～2年前、原研の中に、基礎研究をどう進めるかの委員会が作られ、私も委員の末席をけがした。いろんな議論の中で、誰かの「基礎研究は結局、独立愚連隊のようなものなんですかネ」というつぶやきが、妙に耳に残った。我が国の原子力研究の中核を担い、謹厳で折り目正しいことを求められる原研において、自由闊達な精神と発想を持った研究者（「知の愚連隊」）が育ち、そのような存在を原研は真に許し得るのか？…とその時は思った。あれから一つの時代が過ぎ、原研も周りの社会も変わった。「知の愚連隊」は育ったであろうか。その萌芽は原研の至る所にあるようにも伺える。しかし、それが単なる組織内の「愚連隊」に止まらず、次の時代を突き動かす起爆剤たり得るであろうか。新しい世紀が来る。成長の飽和やトリレンマの隘路を突き抜ける時代のヒーローが「知の愚連隊」から生まれれば、実に楽しく胸がときめく。一世紀前のプランクの時代にも増して。